

## 「研究科長賞」と本誌のオンラインジャーナル化について

平野吉直 信州大学大学院教育学研究科長

信州大学大学院教育学研究科における「研究科長賞」は2007年度に設けられました。この賞は、その年度に提出された修士論文の中から、研究科長が最も優秀と認めたものに授与され、卒業式・学位記授与式後の謝恩会において授賞式が行われます。そして、受賞した論文は、公開予定がなければ著者の希望により『信州大学教育学部研究論集』に学術論文として掲載されることになっています。

2011年度の研究科長賞は、教科教育専攻英語教育専修の得田尚希さんの「日本人英語学習者の英語の自動詞に関する中間言語規則」に決まりました。同論文の内容はオリジナリティ、論理性、研究成果等の観点から秀でたものであり、学術的意義のみならず教育現場への応用が期待されるという実践的意義においても高い価値をもつものと認められました。研究科長賞に応募された他の多くの論文も優れたものであり、選考は甲乙つけがたいもので年々難しくなっています。そのことから教育学研究科全体の修士論文のレベルの底上げが図られていることが実感される感慨深い年度となりました。

そして、また本年度は本誌にとっても記念すべき年度になります。2012年度を原稿募集期間とするこの第6号が、本誌の冊子体としての発行の最終号となり、次号よりオンラインジャーナル版に全面移行することになりました。教育学部伝統の『信州大学教育学部紀要』が査読制を導入したことを契機に『信州大学教育学部研究論集』と名称を改めたことに次いで、一時期を画する大きな改革です。この電子情報化により、掲載論文の検索ヒット率の向上、カラーページの導入や画像・動画など表現様式の多様化、掲載ページ数の増加、発行経費の節減など数々のメリットが見いだされます。『信州大学教育学部研究論集』は本学部の研究機関としての“顔”というべきものです。その本誌の新しい進化と展開が、本学部の研究活動の充実・増進に貢献することを期待すると同時に確信してやみません。